

車力の辨當と解く。心は荷(に)の上(うへ)に在り。

この次の考へもの

力 轉二山 上ノ石 一 刀 斬ニ水簞竹 一
里 道一 抱レ玉 一人郎

昔の英雄の名。誰でしょー?



つぎのことばを出来る文早く言つて御覽
おまへのまへがみさげまへがみ。

家 庭

子母里そーだん

こにし のぶはち

おくさん くらべ

白かねにも、黄金にも、まさるとうたはれる子
實を持てる親の心に、上下や貴賤の差別のあろう
はずはないと思ひますに、兎角、富める人の子や、
貴き人の弟は、人の注意の厚きにすぎ、貧しき
人の子や、賤しき人の子には、人の注意の薄きに
すぐかに見ゆるは、私のひがめでありましょう



右にのべたる事には、縁もゆかりも無いようで有るようの實驗^{じっけん}ばなしと、一つ記るすことの許しを請ひます。そは他ならず、私が今^はの女子高等師範學校の、まだ女子師範學校と申した時に、附屬幼稚園の監事^{かんじ}を勤めて居ました間に、或時、某醫學博士^{めいがくはく}の長男と、某内務高等官にして、後には社寺局長縣知事まで勤められたかと思ふ（兩君とも姓名は態と省く）人の長男と、手を引き合^うて遊歩場でころび、二人とも額^{ひだり}の上にすり疵^{きず}を生じ、保母^{ほぼ}も私も大に心配し、其頃は、幼稚園と順天堂とは向門^{むこうもん}でありましたから、直に應急の手當を請ひたる後に、私は牛込なる内務高等官の宅に附添參^{つき}り、事務掛柴田直記君は、湯島三組町の醫學博士^{めいがくはく}の宅に附添參^{つき}り、注意不行届により、怪我致させ、申譯^{あらわしき}なき次第懇ろに詫入れしに、婦人にも

似合はぬ荒々^{あらよく}しさ聲立てゝ、奥の間にて、士の長男の肩間の疵とは何事ぞ、一轉誤らば、眼をも失なはんに、監事も事務員もあり、夫々保母のありながら、不行届ならずや、と散々に言ののしりて、自身には、出ても來ず、これ聞けがしに、取次に以後御氣を附けなさいといへと云付けし權幕、壁障子^{よのうじ}を通して見ゆるが如く覺え、いともいとも口やしくぞ感じたりしに、引かえ湯島なる醫學博士の婦人の言は、又驚くばかりの謙退なりしぞ、身を縛はられ、鞭うたるゝよりも、心には苦痛を感じたるぞ、今に忘れず。その言に、良人は、只今伯林に留學中にて、折々の通信にも此子のわんぱく盛り、若しや、外の御子様方に、怪我でもさせではならぬからと、毎々の様に申遣し、夫のみ心配致し居りますに、自分の子、しかも一寸したす

り疵に、御手厚の御手當の上、態々送り下される
とは、毎日の御厄介にかけて、加へての厄介、何とも御禮の申上よーもなし、何れ參園の上監事始め
諸先生にも、御面にかけて、篤く御禮申上げよー
といふたと申して、吳れと述べ、猪翌日、早朝に小石川水道町柴田氏の宅まで、卵の折を持參し、歸途幼稚園に寄り、丁寧に諸保姆に挨拶し、只今一寸昨日附添御送下された事務員の御方の宅まで、
御挨拶に參り、極些細の卵折持參致したが、何んといふても御園の御規則であると申し御取り下されぬで、此上は何とも致しかなく、實に痛み入りますと申し述べられたには、甲乙兩夫人かくま
での差あるとは、抑教育によるか、或は氏なくして玉の輿に入りたる類にやと、一方に向ひては、愛敬の念に堪へねばかりなるに、他方に向ひてば

物しらぬにも程こそあれとまで、腹立たれしは、私の心の狹きによるは萬々なれども、交際上言語の大切なる、殊には婦人令嬢はじめ、人の奥様となりては、言語の表てに、心の奥の見え透ぐこと、淺間しけれど、かねて御注意を請はんとするは、禮を失ふ業とはしれど、餘りの腹立しきまゝ、忘れ草ならぬ紙屑籠の底の埋草。

物いへば暑さむし秋のかぜ

下女に對する同情

ふみ子

同情のない家庭といふものはまことに冷なものであります。これに反して家人相互に同情のある家はあたゝかい春のやうなものでありまして、同